

「文明国標準」の南洋観

——大正時代における一教授の認識——

酒井一臣

はじめに

1913（大正2）年12月、京都帝国大学文科大学教授であった原勝郎は、131日間にわたる南洋視察に旅立った。1909（明治42）年、欧米留学帰国直後に京大に教授として着任した原は、西洋史講座を担当しながらも日本中世史の研究も行った当時を代表する歴史学者である。室町時代の公卿の生活史を叙述した『東山時代に於ける一縉紳の生活』は、公卿の日記を巧みに利用した先駆的業績として、現在まで読みつがれている。本稿は、原の南洋旅行記『南海一見』を軸に、主として大正期日本の南洋観の特徴を論じ、それがどのような意味をもっていたのかを考察していく。

原勝郎は、西洋史に関しては幅広く研究を行っていたが、南洋についてはここで取り上げる『南海一見』以外にまとまった著作・論文はない。よって、原の南洋観は、専門家の特別な見解というよりは、一知識人の感想にすぎないともいえる。原を紹介した小伝¹⁾でも、南洋視察については触れられておらず、いわば『南海一見』は原の余技といった扱いをうけているようである。そうしたなかであって、矢野暢は近代日本の南進論のなかに『南海一見』を位置づけ、以下のように評価している。

この本は、ほんとうになにげなく、日本の南方関与の転換の方向を見事に暗示しきっている。つまり、日本の関与の対象である「南洋」がもはや内南洋ではなく外南洋であること、そして、その外南洋はヨーロッパの諸列強の植民地であり、日本はやがてそういう諸列強との関係を気にしなくてはならなくなること、外南洋の土着文化との異和感に日本人が苦しむだろうこと [中略]。²⁾

第一次世界大戦後、日本の委任統治領になった赤道以北旧ドイツ領南洋群島（内南洋）の経済的価値が小さく、結果的に日本の南進は東南アジア（外南洋）に向かうことになったことを考えれば、原の見聞録は日本の南進を占う重要な指摘を含んでいるのはたしかである。しかし、本稿では、南進論の文脈のなかで原の南洋観を分析するのではなく、その歴史観をうかがいながら、むしろありふれた感想の部分にあらためて注目する。それにより、原の旅行記から、大正期に形成される日本人の南洋観の典型を見いだしたい。もちろん、京大教授で留学経験もある原は、大衆とは知識の面でも意識の面でもかけ離れた存在だったはずである。ただし、原の活躍した時代は、海外旅行が一般的なものではなく、海外経験じたいが貴重なものであった。また、南洋移民は一部の代表的な事業家などを除いて、その見解を発表する場はなく、そもそもあらた

めて意見を聞く以上、社会的地位の高い知識人が求められたのは当然のことであった。その意味では、原の感想に大正期の南洋観を代表させるのはあながち無理なことではなく、こうした著名な知識人の論評が、一般的な南洋イメージ形成に影響を与えていったと考えられる。

ところで、当時の日本の対外観には明確な特徴があった³⁾。明治維新以来、近代化の目標となつたのはつねに欧米諸国であり、「文明」とは西洋文明のことであった。19世紀後半から20世紀初期にかけて、近代帝国は最盛期を迎えたが、日本は独立と国際的地位向上のために、西洋文明の摂取につとめ、国民国家と帝国の同時形成、すなわち「国民帝国」をめざすことになる。国民帝国には、排除と包摂の矛盾する論理が併存していた。国民帝国は、国民国家としての一体感創出のためには、支配領域内の人民を国民としてまとめていかねばならなかった一方で、植民地支配正当化のためには、被支配者を一段劣った存在として差別して国民から排除しなければならなかったのである。文明をあまねく行きわたらせ国民の同質化をはかるという「明」の部分と⁴⁾、文明の論理によって恣意的に野蛮とみなしたものを差別し支配するという「暗」の部分をもった「文明国標準」主義こそが国民帝国の特質であった。当然、日本も西洋文明に準拠した文明国標準を志向したのであり、その際、西洋文明を中心とした文明と野蛮の構図も受け入れることになった。

文明国標準とは、本来、国際法の適用にあたって、政治・経済・法律制度のみならず、社会慣習にいたるまで、欧米諸国（文明国）の水準に達しているか、価値観に一致しているかを判断する際の用語である。筆者は、この文明国標準の発想を、国際法分野にとどまらず外交や社会にどのような影響をもっていたのかという観点から、幅広く近代日本史の諸事例に適用させたいと考えている。文明国標準の発想は、帝国日本の対外関係において、欧米に向かうときは文明の輸入者として、アジア諸国に向かうときは文明の輸出者としてふるまうという、日本の二重性をうむことになった。また、日本社会に単純化された形の欧米崇拜とアジア蔑視の風潮を根付かせることにもなったのである。本稿では、この文明国標準という概念をもとに、原勝郎の南洋観を再考し、国民帝国の明暗がどこまで反映されているのか、またそれをいかに評価すべきか論じていく。

そこで、まず、原の歴史観がどのようなものであったのかという点を考察する。これは同時に、国民帝国形成期の日本の歴史学の役割を探ることにもなる。続いて、『南海一見』の内容を分析する。原の南洋への視点は、決して単純な植民地主義ではなく、露骨な帝国拡張論からのものでもない。しかし、やはり文明国標準主義を前提にしていたことはまちがいでなく、「文明と野蛮」「エリートと大衆」といった固定的な対比があった点を示したい。最後に、大正期の南進論の特徴をまとめ、それが後の日本の南洋移民をめぐる諸議論に与えた影響を指摘して結論とする。

1. 原勝郎の歴史観

原勝郎は、1871（明治4）年、盛岡の旧南部藩士の家に生まれ、東京帝国大学文科大学史学科で学んだ。当時の東大史学科は、ルートヴィヒ・リースや坪井九馬三によりドイツ実証史学が導入され、原を京大に誘った親友の内田銀蔵など、次々と有望な研究者を世に送り出していた⁵⁾。1896年、原は帝国大学を卒業し、1899年、第一高等学校教授に着任した。1906年～1909

年には英・仏・米に留学して、帰国直後に京都帝国大学文科大学教授となり、1922（大正11）年から文学部長を務めたが、1924年1月在職のまま死去した。

原は、京大では西洋史の講義を担当し、中世から同時代問題まで幅広い分野にわたって業績を残したが、むしろ現在まで読まれているのは日本中世史に関する著作である。1906年に刊行された『日本中世史』は、第1巻で執筆が途切れ未完に終わったが、文化の衰退期と考えられていた中世史像を転換させた名著として高い評価を受けている。原は、平安王朝文化を「懶惰と驕慢と姪肆との念によりて維持された」⁶⁾と批判し、



原 勝郎

「一国としての日本の発展は此政治上の変革（鎌倉幕府の解説：筆者注）の為に、凡ての方面に於て尽く妨げられたりとは、決して信ずべからざる事に属す」⁷⁾とした。では、何が中世日本社会発展の特色であったのか。それを新仏教の登場と全国にわたって広く文化の伝播があったことに着目したのが、原の日本中世史論の要点であった。

文化の伝播により領域内に一定の文化的伝統があるとの認識をえることが国民国家創造に重要な役割を果たすことは、現在の国民国家論の常識といえるが、そのことは早くも岩倉使節団の報告書でも指摘されたことであった⁸⁾。原も、鎌倉時代になって、京都と東国間のみならず、鎌倉を起点として東北地方、瀬戸内海海運を通じて西国・九州にまで交通の便が発達したことを重視し、足利時代になって群雄割拠となったことで、さらなる文化の伝播が促進され、京都文明が日本全体に広まっていったと論じた⁹⁾。こうした状況で、新しい仏教の宗派が生まれ、全国に布教されたことが重視された。

我国宗教革新の、重大なる現象たる所以は、那邊に存するか。事々しく述べるまでもなく、階級的なものが平等となり、平民的となり、装飾的、学究的なりしものが、実際的になったことである。約言すれば宗教が宗教らしくなったことである。¹⁰⁾

これに対し原は、天台・真言の平安仏教が「何らの信念もなくして綾羅錦繡をまとひ、生民の膏血を竭して経営せる玉殿伽藍の裡に翱翔し翺々として心にもなく経文を囀」¹¹⁾るものに墮落したと批判した。すなわち、行き詰まっていた王朝政治と旧仏教に、尚武的で地方に割拠する武家政権と改革の新仏教を対比させ、中世社会の出現が日本国家の発展に有益だったという構図を描き出したのである。

こうした原の中世観は、天皇親政を正統なありかたとした明治維新の歴史観を相対化する意味もあったが、より重要な点は、日本にもヨーロッパ世界同様の歴史的展開が存在したことを示すことにあった。原は、封建制度を「諸民族が其発達の経路に於て一度は經由せざるべからざる一の社会的状態」とし、西洋中世の封建制は特殊なものではなく、日本も比肩しうる社会制度が存在したと考えていた¹²⁾。くわえて、日本が西洋と同様の発展経路をたどるのであれば、日本にも宗教改革が必要であったが、それを鎌倉新仏教の登場とみたのである。

若し我邦の歴史に於て、彼の西暦第十六世紀に欧羅巴に起つた宗教改革に類似する現象を

求むるならば、それは鎌倉時代に於ける諸宗勃興の外にあるまい。法然上人其他諸宗の開祖たる人々に依つて遂げられた宗教上の革新運動は、実に我邦有史以来未曾有の盛観と称すべきであつて、鎌倉時代が我国の歴史に特別の意義を有する所以は、素より一にして足らざれど、其重なるものを挙げむとせば、先づ此の宗教上の大變動を算へなければならぬ¹³⁾。

封建制があり宗教改革があれば、では、日本も西洋と変わらぬルネサンスはなかったのか。原は、足利時代の東山文化こそが日本のルネサンスであると考えた。

約言すれば、足利時代は京都が日本の唯一の中心となった点に於て、藤原時代の文化が多少デカダンに陥ったとはいいいながらともかく新たな勢いを以て復活した点に於て、而してその文化の伝播力の旺盛にして、前代よりもさらに普ねく都鄙を風靡した点に於て、日本の歴史上に重大な意義を有する時代であるからして、これを西欧の十四、五世紀に於けるルネサンスに比することも出来る¹⁴⁾。

筆者は中世史を専門とはしていないが、現在の研究水準からみれば、鎌倉時代以降の土地制度と西欧の封建制との類似性を強調する解釈には疑問があるし、鎌倉新仏教を革命的ととらえるべきではないとする反論もあろう。また、東山文化をルネサンスに比することにも無理があるように思われる。しかし、原の目的は、細部の検討によって日本と西洋の違いを示すことではなく、むしろ、細部を演繹して日本と西洋の類似性を浮かび上がらせることにあった¹⁵⁾。それは、欧米諸国からの「遅れ」を常に意識していた当時であつて、日本の近代化は不可能ではないことを示すためにも必要なことで、いわば、「文明国標準」の日本史だったといえる。

日本の「ルネサンス」の担い手であつた三条西実隆の日記を利用して書かれた『東山時代に於ける一縉紳の生活』は、現在でも通用する十分な実証性があり、原が史料を基本として歴史を叙述することを軽視していたとはいえない。また、古代の日本文化が中国からの輸入文化そのものではなかったとの解釈に対し、「多少シヨウキニズムの臭がある」としており¹⁶⁾、原は、客観性を欠いた「栄光の」日本史に批判的でもあつた。そうであるならば、演繹的に日本と西欧の中世が同定できると主張することは、日本も欧米諸国と同様の歴史があり、近代化に無理はないと暗示することにつながるため、やはり実証性に欠けた「シヨウキニズム」となるはずであるが、その矛盾を原が意識していたようには思われない。ドイツ実証主義を学んだ原をはじめとした、明治の歴史学者にとって、西洋中心の歴史は当然の前提であり、日本史を西洋史の枠組みに当てはめて解釈することこそ、正統な歴史学であつたはずである。その意味でも、原の歴史観は文明国標準主義であつた。しかし、実証主義を実践していたとはいえ、やはり原には、どこかで明治以来の文明論の雰囲気があることも否めまい。福沢諭吉の『文明論之概略』や田口卯吉の『日本開化小史』を挙げるまでもなく、文明論史学は、開化もしくは文明化にはどういう歴史的条件が必要であつたかを追求するものであつた。そこにはかなり強引な歴史解釈があり、明示的ではなくとも、西洋史から演繹的解釈が行われていたが、だからこそ文明論の叙述には勢いがあり、読むものをひきつけたのである。「新都の経営既に成りて、朱門は八荒に輝き、画棟は空に聳え、典章爰に具はりて、百官有司各其職を分かち…」との『日本中世史』

の華麗な書き出しを読むとき、学者の実証的研究というより、原の文明論者的志向を感じるのである。

では、堅実な実証主義である一方、流麗な文章で文明を論じる一面もあった文明国標準主義の歴史学者原勝郎が、南洋をどのように見て、いかなる感想を抱いたのか。次節で検討していきたい。

2. 『南海一見』の分析

『南海一見』は、1913年末から14年にかけて、原勝郎が東南アジア諸国を巡った旅行記である。どういう経緯で原が旅行に出たのか不明であるが、自序に「此書たるや帰朝匆匆大阪朝日新聞の為に起稿」(9)¹⁷⁾したとあるため、あるいは新聞社の依頼だったのかもしれない。1913年という時期は、第一次世界大戦勃発前であるが、当時日本は「南洋ブーム」にわいていた。大戦で日本がドイツ領南洋群島を占領したことで南洋への関心が高まったとされるのはまちがいで、日露戦後の長期不況と満洲開発の遅れが、南進論へ人々の目を向けたのであって、戦争が始まった後は、大戦景気となって、むしろ南洋熱は冷めたのである¹⁸⁾。よって、原が南洋に旅立った時こそ南洋ブームの最盛期であり、関連書籍が続々と出版されているという状況だった。また、原が東南アジアを巡り、後の委任統治領南洋群島には何の言及もないのは、戦争前のため当然である。前述のように、矢野暢は、原の旅程は、日本の南進が「裏南洋」ではなく「表南洋」になることを暗示するものだとしているが、いささか深読みのしすぎであり、さほど注目されていなかった南洋群島に行かなかったというだけのことであろう。

原の旅程は、次のようなものであった。香港→広州湾→ハイフォン→ハノイ→サイゴン→バンコク→シンガポール→バダヴィア→ジャワ→マレー半島→英領ボルネオ→サンダカン→北ボルネオ→ザンボアンガ→フィリピン→帰国（地名は、現在の一般的表記に改めた）。公的なものではなかったにせよ、帝国大学教授の視察ということで、行く先々で各国の植民地官僚や日本領事・日本人移民の代表者などに案内されての旅であった。本稿では、旅程を追うことはせず、原の南洋観を全体としてまとめるかたちで紹介していきたい。

中国南部を海岸沿いに南下し、仏領インドシナに入った原は、サイゴンで名誉領事サリエーゼから印象的な言葉を聞いた。「植民地が出来ると真先に、英人は銀行を建築し、仏人は劇場を建築する」というものである。原は「すこぶる急所に適中した名言であると思う」(52)と感心している。「銀行」帝国主義、「劇場」帝国主義ならば、各地に神社を建てた日本はさしずめ「神社」帝国主義といえるかもしれないが、本稿で注目するのも、原の歴史学者としての「急所に適中」した感想である。

まず、植民地統治について見てみたい。原は、インドシナ統治におけるフランス人と原住民の親しみに疑問を呈している。

一見すれば印度支那にある仏人は、大いに土人と接近している。日曜日に西貢の寺に参詣した時、土人が着飾った仏蘭西の淑女たちと相雑りて、堂内のよい席に坐しているのを見て、実に意外の感があった。[中略]しかしながら大体から考えると、この土人に接近するとい

うことは、土人を誘導し、向上せしめて、もって己れらに接近せしめるのではない。むしろ仏蘭西人の方から下降して、もって土人に親しむのである。(57)

国際社会のなかで、文明国の一員と認められなければ、独立国家の待遇を得られないことは、西欧諸国が世界をおおいつくした19世紀後半以来の現実であった。日本史を西洋史と並列させて、日本の文明国標準への道は不自然なものではないと論じた原は、南洋の諸地域も西洋文明に追いつくことでしか将来の独立はないと考えていた。統治者であるフランス人は、どこまでも文明国人として被治者を向上させるべきなのである。同化するのであれば徹底して行くべきで、そのためには、家父長主義的な文明化でなければならない。よって、例えば、アメリカ統治前のスペインのフィリピン統治を、圧政だったとしながらも、混血を厭わず、植民地を「著しく母国に類似したもの」にして関係性を深めたことに一定の評価を与えるのである。

英国は、世界第一の植民国と言われているが、その植民地は英国風ではあるけれども、英本国そのものとはすこぶる趣きが違う。然るに西班牙の植民地となると、著しく母国に類似したものが出来る。西班牙の苛政に堪えかねて独立した南米諸国でも、独立後今日に至るまで、母国の西班牙との親密な交際を継続しているのは、即ち母国との間に呼吸の通うところがあって、これが断ち難い連鎖をなしているからである。さればもし植民地ごとにその土人に及ぼした影響の深浅をもって、植民政策の功過を計る尺度とし得るものならば、西班牙ほどの成功を収め得た国はまたとあるまい。(189-190)

ただし、原は、「文明」であるスペインじたいがすでに衰退しているとし、文明化の対象である「土人」のありかたには極めて悲観的であった。

西班牙は欧州においても老国である。ここにおいて比律賓人の西班牙化が、幼弱者の老人化したような状態を呈することとなったのも怪しむに足らぬ。[中略]比律賓人は一種の惰民である。情が激してくると、一時は己を忘れて驚くばかりの活動をなすが、しばらくすると弛んでしまう。独立のために一致興奮した者も、幾もなくして内訌を生ずるのはこれがためである。未婚の女子は勤勉に働くけれど、一旦人に嫁ぐと懶惰になるというのもこれがためである。会合燕遊を好むというもこれがためである。親類縁者を食いつぶすというのもこれがためである。呂宋に既墾地の荒廢に属した所が多いのもこれがためである。(193)

スペインが文明として遅れているか否かは別にして、原は、フィリピン人を「幼弱」・「一種の惰民」と決めつけており、いまだ文明化の対象であることじたいには疑いを抱いていなかったようである。同様に、インドネシアにおけるオランダ統治に関して次のように述べた。

植民地の人民を開発してその独立の準備をしてやるということは、その人民の母国と同種なる場合においてすら、实际的政策として既に宋襄の仁たることを免れない。況んやその

人民の多数が母国人と種族を異にする場合においてはなおさらであるから、かかる政策の実行をもって爪哇^{ジャヴァ}の蘭人に望むのは、全く無理な注文であると言わねばならぬ。(106)

なぜならば、「概して言えば爪哇人というものが、人に駆使せられなければ働くを欲せぬものであることは、争い難い事実であると思う」(107) からであった。

怠惰な「土人」というのは、この時期に固定化していくイメージであった。中村淳によれば、「土人」という用語は、本来「その土地の人」という意味であったが、アイヌ人を「土人」と呼ぶなかで、「未開」の人を指す蔑称となっていったとされる¹⁹⁾。大正初期の南洋ブームにおいて、南洋の人々を「土人」と呼ぶことが定着したようで、原も同時代の印象から自由ではなかった。

こうした原を現在の視点から批判するのは簡単である。いわく、様々な生活・文化・慣習を対等に評価する視点がない、強者の圧政を結果的に肯定する見方でしかないなど。しかし、原に例えば文化相対主義を望むことは、歴史学的に意味があるのだろうか。繰り返すが、20世紀初頭の世界は、西洋文明への近接こそが、新興の非西洋諸国独立の唯一の道であり、日本自身が必死に国民帝国を確立しつつあったのである。その日本にある知識人にとって、勤勉な民衆を育成し文明化することが、植民地支配からの脱却であると指摘することは、「良識」のなせる発言であり、文明化のために宗主国が確固たる文明国標準によって「土人」を同化していくことが、現実的な施策であったのではないか。むしろ、原は植民地支配の圧政を支持していたわけではないが、一方でフランス人の現地人との馴れ合いを批判しているように、文明人としての矜持をもって「土人」と接することを重視していた。よって、たとえ西洋人であっても、品位のない行動をする者に対し、原は厳しい目を向けていた。

「提督ネイイー」号に同乗した先客のうちで、甲板の散歩によく見かけるけれど、食堂には決して出て来ぬ仏蘭西人があった。然るにその仏人は、船が西貢に近くなると、怪しげな服装をした安南女と甲板を闊歩しだした。時としては見るに堪えぬ醜態を演ずる。(57)

乗合いの米人と言えば、多くは比律賓で満期になった兵隊上りである。[中略] 上甲板で手漕をかむ者もある。ベテルを咬んで所嫌わず糟を吐き出す者もある。食事の準備中に食卓から摘み食いをやる小児を見ぬ振りする親もある。(150)

いわんや「野蛮」な東洋人には冷淡であった。

支那その他東洋諸国を旅行して土人の生活状態を知悉すると、一般の東洋人に対する欧米人の軽蔑にも、無理からぬ点のあるのを発見せざるを得ない。[中略] 少なくとも東洋諸国にある日本人の生活状態が、西洋人と同等の域に達するまでは、苦情を言うも詮なかるべしと思われる。(78)

ただ注意すべきは、原は自分自身が東洋人として差別的な扱いを受けることには「不愉快の念を禁ぜぬわけには行かなかった」(78) のであり、オランダ船での待遇の悪さには憤った。食堂で同席させられたのは、「蘭人の子守^{あいのこむすめ}たる混血娘」や「髪の毛縮れ、耳が前の方に向い立った黒

ン坊」(77-78)であったと。待遇への不満を示すためであろうが、『南海一見』のなかでも露骨な表現が目立つ箇所である。ここからは、東洋人が西洋人と平等であるべきだとする発想ではなく、原のようなエリートは西洋社会のエリートと同等の扱いをうけるべきだとする考えがうかがわれる。

文明国標準とは、西洋文明国と非西洋国の差異化をはかるために利用されたが、同時に、同人種内・同国内であっても適用されるものであった。とりわけ、文明国標準をめざす日本のような国には、原のように欧米留学をして京大教授をつとめるエリートと大衆の格差は、すなわち文明と野蛮の対比となって現れてくるのであった。実際、例えば当時の外交官たちの日本人移民への評価は非常に低く、日本の恥をさらしていると極言する者もいた²⁰⁾。原が旅の最後に訪れたフィリピンは、スペインの徹底した欧化政策により、「日本人や支那人を除き、東洋諸民族のうちで、いずれが最も知識が発達しているかと問うならば、将来はいざ知らず、現今まず指を比律賓人に屈せざるを得ない」(192)状態に達していた。それにもかかわらず、比律賓が独立国家としての存立は次のような理由から危惧を表明している。

比律賓人中には代議士として相当な者もあり、行政官として適材もあり、ことに弁護士としては堪能なものが多い。然れども健全な国家は官吏や代議士や弁護士ばかりで維持することが出来ぬ、必ずや勤勉なる民衆の存在を必要とするのである。米国が比律賓に独立を許すかどうかは大疑問であるが、仮りにこれに独立を許すとしても、もし中流下流の人民の状態が今日のみであるならば、その独立し得た比律賓というものの有様も、推測するに難くないと思われる。比律賓人にとっての急務は、独立よりも社会改良にあることは、予の深く信ずるところである。(197)

大雑把な印象論だけで現地人を怠惰と決めつけ、ヨーロッパへの同化を前提にしている点など、原の南洋観は、現在の植民地論などからすれば、全く評価に値しないものかもしれない。しかし、「比律賓」を「日本」に変えれば、大正期の日本でさえも、同様の危機にあったのかもしれない。『南海一見』の結論ともいえるこの部分は、独立を保ち西洋文明化に先んじていた日本の知識人として、フィリピンへの切実な忠告を含んでいたととらえるべきではなからうか。文明と野蛮の構図にあった植民地支配から抜け出すために、文化相対主義的な議論を持ち出すことは机上の空論でしかなく、とにかく文明国標準に達するしかないと考えるのが現実的であった。西洋史学者として、日本と西洋の史的展開の類似性を発見しようとした原勝郎。彼は、西洋文明を摂取した西洋人と同等のエリートとして、いつか南洋諸地域が独立するための方策を示したのである。それは、日本の南進の成否を占うというより、日本の文明化を反映してその行方を占う文明国標準の南洋観であった。

おわりに

原勝郎が南洋を旅した時期、日本は南洋ブームのさなかにあった。矢野暢は、大正期南進論の特徴として、次の4点を挙げている。

1. 議論が実利的、即物的
2. 「公」の思想の傾向
3. 南洋イメージの社会一般への定着
4. アメリカ、ドイツにくわえて、オランダ、イギリス、フランスとの関係考慮²¹⁾

原は、日本人が経営するゴム園を訪れているが、経済進出先として南洋を紹介しておらず、外交論など「公」の思想が論じられることもなく、関心は、もっぱら南洋各地の印象論にあったようである。欧米各国の植民地政策に関しては詳しく紹介されているが、日本がいかに関係調整するのかというような具体策は論じられていない。また、南洋イメージの定着という点に関しても、怠惰な「土人」といった一般的な印象が語られるだけで、さほど注目すべき議論は行われていないのである。その意味では、原の『南海一見』が大正期南進論のなかでどのような位置づけにあるのかは不明確といえる。

むしろ重要な問題は、文明国標準にもとづく原の発想が複層をなしている点である。頂点に欧米の文明国があり、植民地であった南洋各地は、当然「野蛮」の側に置かれる。日本は、中間にあって、欧米に向かうときは「野蛮」の側にあり、南洋に向かうときは「文明」の側に立つことになる。ところが、原自身は「野蛮」な日本という立場を離れて、一等客室のエリートとして、相手が白人であっても対等な立場に立とうとするのである。こうなると、日本人であるにもかかわらず、原と日本人移民の関係は微妙なものとなる。日本人は「冒険致富の念」から移民するため、「気マグレ」で「成功を急ぐ」（132）とある程度で、原が日本人移民をどうとらえていたかは明確ではない。ただし、当時の日本人移民が、洗濯業・写真業などにくわえ娼婦が多かったことを考えると、原が移民に好印象を抱いていたとは思えない。各地の風景や人々の暮らしぶりに詳しく触れているにもかかわらず、日本人移民の具体的な動向にほとんど言及がないのは、どこか不自然でさえある。移民政策の議論となることを避けたためか、一般書ゆえ日本人批判とならないようにしたためか、様々な推測は可能だが、エリートたる京大教授にとって、貧しい移民は、現地人同様遠い存在だったのかもしれない。移民の側からしても、客船の一等船室を利用し、領事が出迎えるような原は遠い存在だったはずである。

鎌倉新仏教が多くの庶民の心をとらえ、文化の伝播が盛んになった中世において、日本の統一性が進んだことを指摘した原勝郎であれば、国民帝国の確立には一層国民の一体感が必要であることは理解していたであろう。しかし、現実には、文明国標準への到達度という点で、原のようなエリートと大衆には非常な乖離があった。すでに述べたように、文明と野蛮の対比は、白人と有色人種、植民地における支配者と現地人という関係にとどまらず、日本社会のなかにもあった。日本の場合、国内では疎外感を味わっていた民衆が移民となったが、南洋では、そうした人々も「文明国」の日本人としてゆがんだ優越感をもつことができた。原は、日本人であることを飛び越え、よくいえば、国際的エリートとして南洋の印象を書きつけていった。しかし、コスモポリタンたろうとしても、欧米人には劣った黄色人種として扱われてしまう。そのいらつきを「混血娘」「黒ン坊」に向けたとしたら、原自身も、文明国標準主義がもたらすゆがんだ優越感に支配されていたことになるのかもしれない。そのことをもって原をことさらに批判することが本稿の目的ではない。アジア・太平洋地域に日本人が進出していくとき、現在

までつきまとう文明の輸入者と輸出者という日本の二面性の問題を大正時代における一教授の認識から探り、そこに文明国標準主義が色濃く反映されていた点が重要なのである。日本と南洋の関係は、その後1930年代になって、アジア間貿易の拡大に伴う経済進出、そして戦時期の大東亜共栄圏下の支配へと展開していく。その際、ふつう、「八紘一宇」や「皇民化」などが日本独特の思想として注目される。しかし、国民国家を超越して広域経済圏を有機的に関連させようとする発想は、イギリス帝国がコモンウェルスへと変貌していったことなど、欧米発の新国際秩序構想であった²²⁾。よって、大東亜共栄圏も、欧米の思想に準拠した面を見逃してはならない。その意味で、文明国標準の南洋観の特質を探ることは、単なる一教授の思考を超えて、近代日本の対外観を通観することにつながっていくのである。

注

- 1) 原勝郎の小伝として、樺山紘一「原勝郎」今谷明ほか編『20世紀の歴史家たち』(1)日本編(上)、(刀水書房、1997年)、45-57頁。
- 2) 矢野暢「解説」原勝郎『南海一見』(中公文庫、1979年)、201-208頁。
- 3) 以下の記述に関して、詳しくは酒井一臣『近代日本外交とアジア太平洋秩序』(昭和堂、2009年)、序章を参照されたい。
- 4) 国民国家のよる周辺部の強制的同化や文化の画一化など、必ずしも国民の創造が明るいものとはいえないが、民主化進展や開発も同様の局面にあったものであり、少なくとも20世紀前半において、国民国家建設は明るい見通しで評価されることが多かった。
- 5) 酒井三郎『日本西洋史学発達史』(吉川弘文館、1969年)、3章1節。
- 6) 原勝郎『日本中世史』東洋文庫(平凡社、1969年)、61頁。
- 7) 同上、9-10頁。
- 8) 一例として、久米邦武編『米欧回覧実記』2巻(岩波文庫、1978年)、114-115頁を参考。
- 9) 以下の原勝郎の論文を参照。「文芸史上の鎌倉時代」「鎌倉時代に於ける人文の地方的伝播」(『日本中世史』)、『東山時代に於ける一縉紳の生活』(講談社学術文庫、1978年)。
- 10) 原勝郎「法然上人と聖フランシス」『日本中世史』、251頁。
- 11) 原「文芸史上の鎌倉時代」、209頁。
- 12) 原勝郎『西洋中世史概説・宗教改革史』(同文館、1931年)、82-84頁。
- 13) 原「法然上人と聖フランシス」、251頁。
- 14) 原『東山時代に於ける一縉紳の生活』、28頁。
- 15) たとえば原は以下のように述べている。「予はひたすらに帰納を繰り返すことを以て史家の任務の第一だとは考えておらぬ」、同上、8頁。
- 16) 同上、9-10頁。
- 17) 原『南海一見』9頁。なお、煩雑となるため、以下『南海一見』からの引用は、引用箇所後に、(9)のように頁数を挙げ、脚注とはしない。
- 18) 酒井『近代日本外交とアジア太平洋秩序』、3章3節。
- 19) 中村淳「(土人)論」「土人」イメージの形成と展開」篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』(柏書房、2001年)、85-128頁。
- 20) 一例として、『日本外交文書』(対米移民問題経過概要)所収の埴原正直の報告書、186-241頁など。
- 21) 矢野暢『南進』の系譜』(中公新書、1975年)、68-78頁。
- 22) こうした議論に関し、例えば、酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』(岩波書店、2007年)がある。